

涙の数だけ大きくなれる！

私が、まだ若い頃勤務していた中学校での話です。

その学校での卒業式は、在校生全員合唱と卒業生全員合唱があり、もちろん指揮者とピアノ伴奏者は、生徒自身が担当していました。

学校最大の行事である厳粛な卒業式において、何百人もの出席者が注視する中、とりわけピアノ伴奏は、生徒にとって真に晴れの舞台と言える榮譽あるものであり、その年も、在校生全員合唱のピアノ伴奏者に、2年生の希望者が10名程度立候補しました。

担当学年や音楽部の職員で話し合っ、ピアノ伴奏代表生徒を決定し、その名を公表した2学年朝会の直後のこと。立候補して選ばれなかった私のクラスのA子が、私のところに飛んできました。

「先生たちが勝手に決めたんですよ。どうして私じゃないんですか？私が学年で一番ピアノがうまいのは、先生方だって他のみんなだって誰でも知っているはずでしょ。」と、かなり興奮した様子で私に食ってかかってきたのです。確かにピアノの実力は学年で群をぬいてピカ一でした。そして、彼女が多分クレームをつけてくるだろうということは、実は私が予想していた通りの展開だったのです。

私は静かに笑って、「そうか、それじゃあ、クラスみんなにも意見を聞いてみようか。」と言って、帰りの会で「Aさんが残念ながら在校生全員合唱のピアノ伴奏者に選ばれなかったんだけど、みんなはどう思う？」とクラス全員に紙を配って書いてもらったのです。

放課後、A子を前に、クラス全員が書いた内容をすべて読んで聞かせました。『係活動や清掃を一生懸命やらない人にやってほしくない』『自分勝手な人間に、全校を代表する大事な役目をする資格はない』といったような辛辣な内容のものばかり。彼女を擁護する内容は一つもありませんでした。

彼女は、何事にも能力が高く、明るく活発で社交的な性格ながら、やや自己中心的でわがままな一面があり、クラスや学年で反感を抱いている子は少なくありませんでした。いろんな意味で実力や他への影響力がありながら、それがいい方向に出ていなかったのです。

彼女のためにも、そしてクラスや学年のためにもどうにかしたい生徒だと、ずっと思い続けていた存在でした。

A子は、その場に泣き崩れ、そしてずっと泣き続けました。家に帰ってからも一晩中泣いていたそうです。かわいそうな仕打ちをしてしまいましたが、私は、あえて、後戻りのできない大きな勝負に打って出たのです。

その日から私とA子は、ほとんど目を合わせることもなく、言葉を交わすことなく、そして、3年生になって、私の担任するクラスとは別のクラスの子になりましたが、私自身、自責の念とわだかまりを感じながら、せつない日々を送ることになりました。

でも、同じ学年部の職員として日々のA子の様子を端から見ていると、少しずつ彼女に変化が見てとれました。

人の嫌がるようなクラスの仕事や役割を自分から積極的にするよう姿が見られるようになってきたのです。3年生に進級してからは、クラス委員に立候補し、学年やクラスをまとめる縁の下の力持ちとして、献身的に活動する姿が見られるようになってきました。また、所属する吹奏楽部の主力として後輩の指導に精を出し、全国大会出場の前動力として活躍しました。

そしてあの日から1年が過ぎ、再び卒業式の季節です。一ヶ月後に卒業式を控え、今度は卒業生全員合唱の指揮者・伴奏者選びです。ところが、どうしたわけか、あのA子が伴奏者希望の申し出をなかなかしないのです。申し出〆切日に、私は思い切って1年ぶりに彼女にこう切り出しました。

「どうして今年は立候補しないんだ。俺のことまだ恨んでいるのか？この1年お前がいろんなところで頑張ってきたのはみんな知ってるから、俺は、だれが立候補しても、今年こそは、お前にピアノを弾いてもらおうと決めてたんだけど……」
そして彼女はへと答えたと思いますか？……………

「先生のこと恨んでなんかいません。だれよりも尊敬しています。先生に素直に謝ることも接することもできなくて本当にすみませんでした。先生、本当にありがとうございます。でも、私なんかよりもずっと頑張って努力している人や、伴奏者としてふさわしい人は他にたくさんいますから。私なんて……………」

全く嫌みのない晴れ晴れとした輝く笑顔で話す彼女のこの言葉を聞いた瞬間、思わず目頭が熱くなりました。そして、その後の度重なる説得にもかかわらず、最後まで彼女がピアノ伴奏を引き受けることはありませんでした。

家庭でもA子のわがままぶりに手を焼いていた彼女の母親とは、それまでも事あるごとに様々な相談を通して連絡を密に信頼関係を構築してきました。あの涙の日、私のとった対応の真意にも当然理解を示してくれはしましたが、その実、母親としての葛藤は大きかったはずです。卒業を間近に控えたある日、彼女の母親が私に涙ながらに語ってくれた言葉です。

「先生のごことは100%信頼していたつもりでも、一年前のあの日、家庭であれだけ泣いて落ち込む娘の姿を見ていると、何だかだんだん我が子がかわいそうになってきちゃって。先生のとった対応の真意をわかっているつもりでも、何でこんな仕打ちをするんだろうと。でも、子どもも親も試練は必要ですよ。かわいそう、かわいそうで、何でも子どものいうことを聞いて甘やかしてきたツケが回って今があるわけなんで。あの日のおかげで、娘にとっても私にとってもかけがえのない中学校時代になりました。ありがとうございました。」

私は、これまで、みなさんに、「周囲に愛され、励まされ、応援されるような人間」になってほしい、と度々言い続けてきました。

そのためのキーワードがここにあります。それは、『感謝』『謙虚』『モラル』です。A子は、あの日のいつまでも枯れ果てることのない涙と引き替えに、そのことによりやく気づいたのです。『成長』するとはこのようなことではないでしょうか。

このことがわかっている人間でないと、「周囲に愛され、励まされ、応援されるような人間」にはなれませんし、集団をリードする立場や役目や務まらないと思います。涙は心の汗です。つらくせつなく涙を流す場面があったとしても、それが明日への笑顔になるような人生を歩んでほしいと思います。